

## I-2

寛永・正保期造営の仁和寺境内の特徴に関する一考察  
徳川家光造営の社寺整備に関する一事例On the character of the precincts and buildings were reconstructed during the period of the Kanei and Shoho eras  
One case of shrines and temples were reconstructed by Iemitsu Tokugawa○加藤千晶<sup>1</sup>, 重枝豊<sup>2</sup>\*Chiaki Kato<sup>1</sup>, Yutaka Shigeeda<sup>2</sup>

Abstract: In the early Edo period, many shrines and temples were reconstructed by the Tokugawa. In particular, it is an important period in considering the precincts of Edo era. In this paper, I tried to verify the character of the precincts and buildings were reconstructed during the period of the Kanei and Shoho eras. As a result, it was suggested that the placement plan of buildings was adjusted visually.

## 1. はじめに

江戸時代初期, 多くの有力な社寺で造営ラッシュをむかえる。その背景には, 中世の戦乱や火災などからの社寺復興に対する徳川家の援助があり, 有力社寺の再編成に伴い, 伽藍も新たに再編成された\*<sup>1</sup>。中でも家光の造営事例が多く, 少なくとも 34 カ所の社寺におよぶことが確認される\*<sup>2</sup>。そのほとんどが伽藍全体の整備におよび, 事例として日光東照宮, 清水寺, 浅草寺などがある。中世から近世への境内構成の変化と近世の社寺境内の成立を語る上で, 家光在位時は一つの重要な時期といえる。本稿では, 家光造営社寺の中でも境内構成に大きな変更がみられる寛永・正保期の仁和寺造営を取り上げ, 近世の境内再編に伴う仁和寺境内の空間的特徴について検討したい。

## 2. 寛永・正保期の仁和寺再興の経過

仁和寺創建は, 光孝天皇が大内山麓に「西山御願寺」の造営に着手し翌年崩御, その後宇多天皇によって仁和 4 年 (888) 落成と伝える (『本要記』, 『日本略記』)。以来仁和寺は代々皇子皇孫が住職を務めた。平安から鎌倉期には, 仁和寺の寺域に 70 余もの院家・子院を有し, 隆盛をきわめた。しかし応仁の乱により, 主要伽藍を始め院家・子院を含める一山が灰燼に帰した。それから約 170 年後, 仁和寺門跡覚深法親王が寛永 11 年 (1634) の家光上洛時に仁和寺再建を出願し, 許可が下りる。同 18 年から敷地の造成に着手, 建築工事は同 20 年から始まり, 慶長度造営内裏の建物を移転した金堂, 宸殿, 御影堂が初めに着手された。次に五重塔, 仁王門, 中門, 観音堂, 経蔵, 鐘楼, 九所明神が造営され, 正保 4 年 3 月に諸堂本尊が開眼供養された。

## 3. 『本寺堂院記』, 『本要記』にみる寛永・正保造営時の諸堂の由来

寛永・正保再興時に, 応仁の乱焼失以前の伽藍と院家・子院及びそれらの諸堂舎の構造・由来を調べあげた史料が『本寺堂院記』と『本要記』である\*<sup>3</sup>。正確な史料である確証はないが, 寛永・正保再興時では, 同史料を参考に諸堂舎の計画にあたったと考えられる。

金堂は, いずれの史料も仁和 4 年 (888) 創建と伝える。『本寺堂院記』の金堂の条に, 「瓦葺, 南面, 在三面廻廊, 小松天皇御建立」とある。小松天皇以降に金堂建立の記載がないことから, 応仁の乱焼失の金堂は小松天皇在位時 (正平 23・1368—文中 2 年・1373) に建てられたとみられる。天永 2 年 (1111), 元永 2 年 (1119) 造営の金堂は檜皮葺五間四面であり, 五間三面の礼堂が付属していたことがわかる。

鐘楼は三間四方で, 元永 2 (1119) 四月十三日に炎上, 二階であったことが記載されている。

観音堂は, 現状観音堂の安置仏が観音院のものと同じし, もとは観音院という院家にあったとみられる。代々, 観音院では伝法灌頂が行われたことを記し, 観音堂には廻廊が付属していた。

五重塔は旧仁和寺伽藍に存在したかは詳しい記述に欠ける。しかし現状五重塔の安置仏や内部彩色などが, 観音院御塔とよく一致する。このことから, 五重塔は, 観音堂と同様に寛永・正保期に主要伽藍に組みこまれたと考えられる。

その他旧仁和寺伽藍に存在が確認されるのは, 経蔵, 御影堂, 九所明神, 中門であるが, その建築の特徴と位置は不明である。また仁王門に関する記述はみられなかった。旧仁和寺伽藍内にあったもので, 寛永・正保期に再興されなかったのは, 三面僧房, 食堂, 新堂, 薬師堂, 宝蔵二字, 角堂, 不動堂, 北斗堂である。

## 4. 配置計画について

1 : 日大理工・院 (前)・建築 Department of Architecture, CST, Nihon-U. 2 : 日本理工・教員・建築 Department of Architecture, CST, Nihon-U.

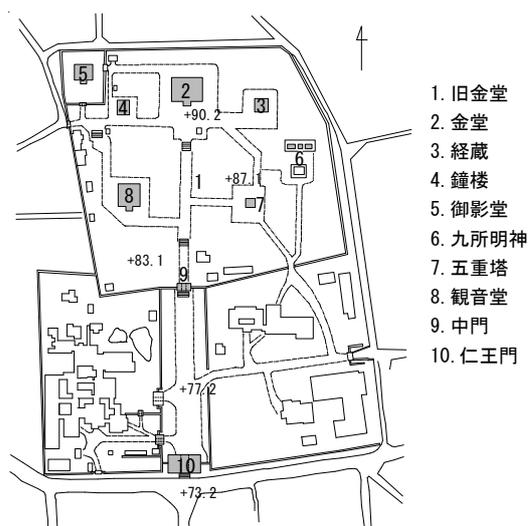


図 1. 仁和寺伽藍配置図

京都府教育委員会：1993 の伽藍配置図を基に作成

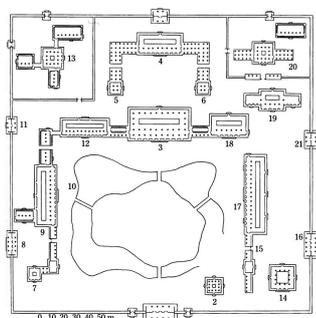


図 2 法成寺伽藍配置図（清水擴復元）

（日本建築学会『日本建築史図集 新訂第二版』，彰国社，2009）

応仁の乱以前の伽藍については、福山敏男、上村和直の研究が詳しい。これらの研究によると、旧仁和寺伽藍と仁和寺配下の院家の配置は、条坊制の地割に基づき、南北軸が南に3度程度傾いていたことがわかっている<sup>\*4</sup>。また応仁の乱焼失後も旧金堂の土台が残っていたようであり、その規模は南北28間、東西38間、土台の東南隅は、寛永再興の五重塔に位置していた<sup>\*5</sup>。このことから、旧金堂土台の位置は、旧仁和寺伽藍の中央に位置していたと想定される。以上の旧仁和寺伽藍の状態から、寛永・正保時には、仁和寺伽藍中心の南北軸が直され、観音院の堂舎が組み込まれたことにより、堂舎の配置が大きく変更されたことがわかる。

また、寛永・正保造営時に、敷地の造成がなされている。現状の仁和寺伽藍をみると、仁王門から中門までの一段目、中門から観音堂・五重塔より南の二段目、観音堂・五重塔がある三段目、金堂・経蔵・鐘楼・御影堂がある四段目というように、伽藍が段状に造成されている。下段は、宸殿や書院などの法親王の住居群、中段は観音堂、五重塔といった元観音院の建物、上段は金堂や御影堂、鐘楼、経蔵といった旧主要伽藍の建

物というように、伽藍が構成されている。

## 5. 結語

寛永・正保期再興の仁和寺伽藍は、南北軸が直され、敷地が段状に造成された。また観音院の堂舎が組み込まれ、堂舎の配置が大きく変更された。この寛永・正保期の仁和寺伽藍構成の変化の特徴を理解するため、応仁の乱焼失以前の旧仁和寺伽藍と類似するとみられる法成寺、法勝寺<sup>\*6</sup>と比較したい。法成寺、法勝寺は、方形外郭内の中央南北軸とそれに直行する東西軸上に堂舎が配置され、それぞれ廻廊によって繋がっている。このことから各建物の配置が相互に関係し、一つの伽藍内で完結した配置を持つといえる。

これに対し、寛永・正保期造営の仁和寺伽藍は、金堂、中門、仁王門を通る南北軸以外は、明快な軸線を持たず、個々の建物が独立している。また、伽藍が段状であることを踏まえると、独立した堂舎の配置に視覚的調整を行い、伽藍全体に整合性を持たせたと考えられる。また、寛永・正保造営時に観音院内の堂舎が主要伽藍内組み込まれたことは注目される。応仁の乱以前は伝法灌頂は観音院内で行われていたが、現在では観音堂で行われている。このことは、寛永・正保時の仁和寺伽藍の変化が、個々の建物で行われる儀式を可視化することであったことを示し、参拝者に儀式空間を見せる場として近世仁和寺伽藍が再構成された可能性が示唆される。

## 6. 註釈

- \*1 近世社寺境内については光井渉の研究が詳しい。特に中世から近世の社寺境内の転換については、浅草寺の寛永、慶安期の造営の分析を通して論じている。（参考文献[6]）
- \*2 現存するもので24カ所、後世の建替えや戦災で現存しないものが10カ所ある。また、この中には東照宮勧進による造営事例を含む。
- \*3 いずれも寛永・正保期の仁和寺復興に尽力した顕証による著書。
- \*4 参考文献[2][3]
- \*5 『本要記』  
金堂之土臺、南北廿八間、東西三十八間、廻廊、東西各十間、金堂左右也、同南北廿間、自金堂之土臺六尺許下、  
「寛永年中再興五重塔婆者、上古ノ金堂土臺、東西之隅ニアタレル也。」
- \*6 法成寺、法勝寺の伽藍は条坊制の地割に規定される点や、金堂に折れ曲がった廻廊が付属するなど旧仁和寺伽藍と共通点する。それぞれ清水擴、福山敏男が境内の復元をしている。

## 7. 参考文献

- [1] 奈良文化財研究所：『仁和寺史料 寺誌編二』，1967。
- [2] 上村和直：「御室地域の成立と展開」、『仁和寺研究 第4輯』，2004。
- [3] 福山敏男：「仁和寺の創立」、『寺院建築の研究下 福山敏男著作集三』，中央公論美術出版，1983。
- [4] 『重要文化財仁和寺飛瀟亭並びに国宝金堂 重要文化財遼廓亭・御影堂中門 修理工事報告書』，京都府教育委員会，平成1999。
- [5] 『重要文化財仁和寺鐘楼・経蔵・遼廓亭修理工事報告書』，京都府教育委員会，1993。
- [6] 光井渉『近世社寺境内とその建築』，中央公論美術出版，2001